目次

凡例……三
解説……五
雨月物語序……一五
巻之一
白峯……一六
菊花の約……三一
巻之二
淺茅が宿……四四
夢應の鯉魚……五八
巻之三
佛法僧……六七
吉備津の釜……九九
巻之四
蛇性の婬……九三
巻之五
青頭巾……一九
貧福論……二〇

解説

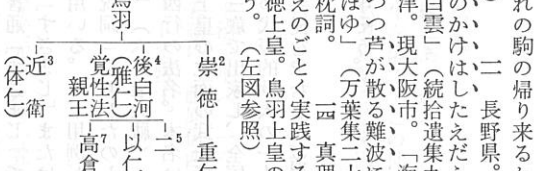
「雨月物語」が書かれたのは、序文にもあるように明和戊子すなわち明和五年（一七六八年）であるが、刊行されたのは八年後の安永五年（一七七六年）であった。この刊行の遅れについては、従来いろいろの説があるけれども、明和八年に同じ出版店野村長兵衛店から出された別の本の末尾広告に「雨月物語」の予告が見え、「近日出版」とあるから、すでに明和八年には一応板刻も出来ていたと考えるのが妥当のようである。

ところで、明和五年にどうして「雨月物語」が書かれたのか。まずこの問題から考えてゆきたいと思う。明和期というのは、宝暦・明和・安永・天明と続くいわゆる田沼時代の初期であるが、このころは厳格な享保の改革を推進した江戸幕府の将軍徳川吉宗が宝暦元年（一七五一年）に歿して、何か時代の変り目を感じさせる時期であった。小説界もそうであって、関西では井原西鶴によって創められた浮世草子が、元文元年（一七三六年）の江嶋其磧の死、延享二年（一七四五年）の八文字屋自笑の死によって凋落の傾向を示し、宝暦・明和のころは浮世草子に代る新しい小説が待望されるという時期でもあった。事実明和四年（一七六七年）には、八文字屋が閉鎖し、大坂の升屋に版権を譲るということが起っているのである。この浮世草子の終焉と、「雨月物語」を含めた読本の興起とは、決して無関係ではない。明和期はまずそういう時期であったということを認識しておく必要がある。

浮世草子の衰退の原因には、一つには享保の改革（一七一六年）の打撃による関西の不景気ということもあった。浮世草子はもともと町人生活を活写するという点に本意があったわけであるが、町人生活が停滞すれば小説も低調になるというのは自然の成り行きで、享保以後の八文字屋本などもむしろ趣向に苦労して刊行を続けようとする傾向があった。しかし、趣向にも限界がある。小説はだんだんつまらなくなった。そういう時に不意に現れたのが学者の小説、高踏的な小説であったのである。寛延二年（一七四九年）大坂で発行された都賀庭鐘の「古今奇談英草紙」であった。

「古今奇談」という角書でも分るように、これは中国明末の白話小説「今古奇観」に倣ったもので、「今古奇観」の説話総数四十話の内五話を、ほかに「警世通言」から二話、「喩世明言」（別名古今小説）から一話を採り、原話の中国説話を日本の話に翻案したものであった。中国では明末（一六二一年――一六四四年）に宋元以来の説話を集録することが盛

一 香川県高松市と坂出市の中間の岬にある白峯山。崇徳上皇を祭る白峯寺がある。現地では「シロミネ」と呼んでいる。 二 逢坂山。京都と大津の中間にある。鈴鹿関・不破関と共に三関と言われ、古来有名な歌名所。 三 秋来し山。山は逢坂山のこと。 四 現在名古屋市緑区鳴海町。昔はこの辺まで海岸であった。「鳴海潟潮干はるかにあり通ふ跡のみ見えて立つ千鳥かな」（新載集六） 五 静岡県駿東郡浮島村。「いつとなき思ひは冨士の煙にて起きふす床や浮島が原」（山家集） 六 静岡県清水市興津町 清見寺下。「よもすがらふじの高根に雪消えて清見が関に澄る月かげ」（詞花集九） 七 「紫の一もとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞみる」（古今集十七） 八 宮城県。松島湾の南端。「塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここによらなむ」（続後拾遺集十五） 九 秋田県。秋田と酒田の中間。「さすらふる我が身にしあれば象潟やあまの苫屋にあまたたびねぬ」（新古今集十） 一〇 群馬県群馬郡佐野村。いま高崎市。「夕霧に佐野の舟橋音すなりたなれの駒の帰り来るかも」（詞花集九） 一一 長野県。「わけ暮す木曽のかけはしたえだえに行末遠き峯の白雲」（続拾遺集九） 一二 難波津。現大阪市。「海原のゆたけき見つつ芦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ」（万葉集二十） 一三 旅の枕詞。 一四 真理を観察思念し教えのごとく実践すること。 一五 崇徳上皇。鳥羽上皇の一院に対していう。（左図参照）



一六 晴天をいう。「伊夜彦のおのれ神さび青雲のたなびく日すら小雨そぼふる」（万葉集十六） 一七 白峯山の西北方にある。「これなん」が正しい。 二 永治元年（一一四一）十二月、崇徳天皇位を異母弟（近衛）に譲る。崇徳二十二歳、近衛二歳。 三 荘子逍遙遊「藐姑射ノ山ニ神人有リテ居リ」仙洞御所即ち上皇の御所を謂う。玉の林は宮殿のこと。 四 禁は占に同じ。

雨月物語巻之一

白峯

一 あふ坂の関守にゆるされてより、二 秋こし山の黄葉見過しがたく、三 濱千鳥の跡ふみつくる四 鳴海がた、不盡の高嶺の煙、五 浮嶋がはら、六 清見が關、七 大磯小いその浦〳〵、八 むらさき艶ふ武藏野の原鹽竈の和たる朝げしき、九 象潟の蜑が苫や、一〇 佐野の舟梁、一一 木曾の棧橋、心のとゞまらぬかたぞなきに、猶西の國の哥枕見まほしとて、一二 仁安三年の秋は、一三 葭がちる難波を経て、須磨明石の浦ふく風を身にしめつも、行〳〵讃岐の一四 眞尾坂の林といふにしばらく笻を植む。一五 草枕はるけき旅路の勞にもあらで、一六 觀念修行の便せし庵なりけり。

この里ちかき白峰といふ所にこそ、一七 新院の陵ありと聞て、拝みたてまつらばやと、十月はじめつかたかの山に登る。松柏は奥ふかく茂りあひて、一八 青雲の輕靡日すら小雨そぼふるがごとし。一九 兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳だちて、千仞の谷底より雲霧おひのぼれば、咫尺をも鬱悒こゝ地せらる。木立わづかに間たる所に、土墩く積たるが上に、石を三かさねに疊みなしたるが、荆棘蓽蘿にうづもれてうらがなしきを、これならん御墓にやと心もかきくらまされて、さらに夢現をもわきがたし。

白峯寺

現にまのあたりに見奉りしは、紫宸清涼の御座に朝政きこしめさせ給ふを、百の官人は、かく賢き君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。二〇 近衛院に禪りましても、二一 藐姑射の山の瓊の林に禁させ給ふを、思ひきや二二 麋鹿のかよふ跡のみ見えて、詣つかふる人もなき深山の荆の下に神がくれ給はんとは。二三 萬乘の君にてわたらせ給ふさへ、宿世の業といふものゝおそろしくもそひたてまつりて、罪をのがれさせ給はざりしよと、世のはかなきに思ひつゞけて涙わき出るがごとし。終夜 供養した